

現在日本では、日常の冠動脈診療および治療に IVUS が使用されているが、IVUS 画像を診断する上で、きれいな画像で観察・判断を行うことは重要である。Reverberations や air bubble 等のアーチファクトが回避された画像で診断を行う必要がある。

IVUS による病変の観察ならびに評価を行う際、LAD と D1 の分岐方向により心筋側と心外膜側の方向を同定することが可能であり、こうした情報によりより正確な診断が可能となる。

冠動脈形成術施行時の代表的な合併症として、distal emboli や coronary perforation があげられ、こうした合併症の回避に IVUS は有用である。IVUS 上、attenuation plaque を認める症例では distal emboli のリスクは高く、冠動脈形成術施行時に aspiration や distal protection を考慮すべきである。また coronary perforation の際に、上述したように穿孔が心外膜側方向あるいは心筋側方向であるかの情報が得られれば、その後の管理・治療に非常に有用な情報となる。

上記したような点などを配慮することによって、IVUS 診断はよりよい冠動脈治療に寄与するものと考えられる。

(参考文献)

総合臨床 54 増刊 : 18, 2005